分析心理学的見地からみた臨死体験

人 見 佳 枝[1、2]

1．近畿大学医学部精神神経科学教室
2． ISAP-Zurich, Switzerland

要 約

臨死体験に関する記述やモチーフは、古くから洋の東西を問わず、文学作品や絵画などに散見される。しかしオカルトの類と関連づけられやすく、長い間、これらが研究の対象となることはなかった。キューブラー・ロスが1975年に出版した『死ぬ瞬間』は世界中でベストセラーとなった。これ以後、さまざまな臨死体験に関連する書籍が出版され、臨死体験を含む「死」についてもオープンに語られるようになった。典型的な臨死体験の内容はほぼ共通している。そのうちのある部分は、その人の属する文化、宗教観などに影響を受ける。しかしながら核となる体験においてはほぼ共通した特徴が認められ、従って臨死体験は個人的な内容と、普遍的な内容との二重構造になっているといえる。臨死体験後、体験者に起こる変化も興味深い。臨死体験後には「宗教的というよりスピリチュアルになる」「特定の宗教にとらわれなくなり、自分の内なる神を信じるようになる」などといった変化が起こることが報告されており、これは体験者の文化や宗教の違いを問わない。分析心理学の創始者であるC.G.Jungは最も有名な臨死体験者のうちの一人である。臨死体験はその後の彼の人生に強い影響を与えており、それが彼に人間の本質についてのより深い洞察をもたらし、新しい世界観（die Weltanschauung）を与えたことが推察される。このように、臨死体験は分析心理学において極めて興味深いテーマであり、論ずるべき内容を多く含んでいる。分析心理学においては夢やイメージなどを無意識からのマテリアルとして重要視するが、臨死体験も同様の見地から考察することが可能であると考えられる。

キーワード：臨死体験、分析心理学、ユング、二重身、超越機能

Abstract

Description and motifs of near death experience (NDE) can be seen ancient literatures and paintings but it was not an object of research for long time. This theme was never talked openly because everyone was afraid that they were regarded as psychotic or occultist. "On Death and

Dying" was published by Kübler Roth in 1975. This book triggered a tendency that NDE can be discussed openly. After "On Death and Dying", a lot of books about NDE were published and researches were also started from various field.

There are a lot of interesting contents in NDE. Some of these contents depend on each culture, race and religion. However, core contents are quite common among the whole human beings. So NDE has dual contents, personal and universal.It is also interesting what will happen to people after NDE. Generally, it is known that people become more spiritual rather than religious. They come to feel inner God, but they are not prepossessed with particular religion any more.Jung had NDE when he was 69 years old. It is tremendous dynamic experience and it changed the rest of his life dramatically. That is to say, he got deeper insight of essential human beings and new worldview. Thus NDE includes quite important essence for religion and analytical psychology. Although NDE and dream are discriminated, it is possible to discuss on the same ground. Even if pattern of experience is different, both of them come from unconscious.

1．はじめに

臨死体験とは事故や病気などで死にかかった人が生還後に語る一連のイメージのことを指す。臨死体験とは何なのかについては、さまざまな学問的立場から解釈が試みられているが、いまだ結論には至っていない。ひとつの学問領域のみからこの現象のすべてを説明するのは不可能であり、多面的に理解する必要がある。

著者は、2010年よりISAPZURICH（International school of analytical psychology Zurich）に留学中であり、今回分析心理学的な観点から臨死体験を理解しようと試みた。C.G.ユングは分析心理学の創始者であるが、彼自身が臨死体験を持ったことがよく知られている。彼自身の臨死体験および立花隆氏の著書『臨死体験』を参考に、具体的な臨床例もあげ、臨死体験の実際、その文化差および、体験後の死生観の変化などについて考察した。

2．臨死体験の定義

一般的に共有されている臨死体験の意味は上述の通りであるが、同様の体験は臨床的に重篤でない状況下でも起こり得ることが知られている。このため、International association for near-death studies（IANDS）による臨死体験の定義は「死に瀕した、もしくは身体的または感情的に危機的な状況にある人に起こり得る深遠な心理学的体験」とされている[1)]。

救急医療の進歩にともなって、以前は助からなかった症例が救命されうるようになった。そのため臨死体験の報告例も増加し、心停止した患者が臨死体験を体験する率が高いことも知られるようになった[2)]。これにより急激な脳血流の減少が臨死体験の一因であろうと推

測されているが、これ以外にセロトニン、エンドルフィン、高炭酸血症、側頭葉てんかん、低酸素血症なども原因であるとされている。しかしそのうちのどれもこの現象をすべて説明しうるものではない。

なお医学論文においては、臨死体験の定義は厳しく限定される。この場合は、完全な心機能もしくは呼吸機能の停止と完全な意識消失下で体験した内容だけが臨死体験とされることが多い[2)3)]。また臨死体験の出現率は性別、結婚の有無、社会的地位、人種、臨死体験に関する知識などと関連しないことも知られている[4)]。臨死体験を巡っては大きく分けて二つの主張がある。体験が幻覚であるとして器質的に説明しようとする立場と、現実の体験だとして、これをもって死後の世界の証明とするとする立場である。しかし体験すべてをどちらか１つだけの立場から説明することはやはり不可能である。

３．ユングの臨死体験

ユングはその自伝の中で、自身の臨死体験について述べている。1944 年、69 歳の時にユングは心筋梗塞と足の骨折のために入院中であった。その折、以下のようなビジョンを見る。

「私は宇宙の高みに登っていると思っていた。はるか下には、青い光の輝くなかに地球の浮かんでいるのがみえ、そこには紺碧の海と諸大陸がみえていた。脚下はるかかなたにはセイロンがあり、はるか前方はインド半島であった。私の視野のなかに地球全体は入らなったが、地球の球形はくっきりと浮かび、その輪郭は素晴らしい青光に照らしだされて、銀色の光に輝いていた。地球の大部分は着色されており、ところどころ燻銀のような濃緑の斑点をつけていた。（中略）私が岩の入り口に通じる階段へ近づいたときに、不思議なことが起こった。つまり、私はすべてが脱落していくのを感じた。私が目標としたもののすべて、希望したもの、思考したもののすべて、また地上に存在するすべてのものが、走馬灯の絵のように私から消え去り、離脱していった。この過程はきわめて苦痛であった。しかし、残ったものはいくらかはあった。それはかつて、私が経験し、行為し、私のまわりで起こったすべてで、それらのすべてが、まるでいま私とともにあるような実感であった。それらは私とともにあり、私がそれらそのものだいえるかもしれない。いいかえれば、私という人間はそうしたあらゆる出来事から成り立っているということを強く感じた。これこそが私なのだ。『私は存在したものの、成就したものの束である。』この経験は私にきわめて貧しい思いをさせたが、同時に非常に満たされた感情をも抱かせた。もうこれ以上に欲求するものはなにもなかった。私は客観的に存在し、生活したものであった、という形で存在した。最初は、なにもかも剥ぎとられ、奪われてしまったという消滅感が強かったが、しかし突然、それはどうでもよいと思えた。 すべては過ぎ去り、過去のものとなった。かつて在った事柄とはなんの関わりもなく、既成事実が残っていた。なにが立ち去り、取り去られても惜しくはなかった。逆に、私は私であるすべてを所有し、私はそれら以外のなにものでもなかった。」[5)]

このビジョンの中にユングの主治医が「原初的な姿で」現れ、ユングは引き返さなければならなくなり、生還する。ユングは落胆し、主治医に怒りすら感じる（その後まもなくこの医師は亡くなり、ユングは彼がビジョンの中で「原初的な姿」であったことと彼の死とを関連づけている）。その後しばらく、ユングは落胆して日々を過ごしていたが、夜になると崇高なビジョンが現れ、幸福感に満たされる。これは数週間にわたり、その後ユングは人生についての深い洞察に至る。それは以下のように表現されている。

「またもう一つ、病気によって私に明らかになったことがあった。それを公式的に表現すると、事物を在るがままに肯定するといえよう。つまり、主観によってさからうことなく、在るものを無条件に『その通り（イエス）』といえることである。実在するものの諸条件を、私の見たままに、私がそれを理解したように受けいれる。そして私自身の本質も、私がたまたまそうであるように、受けとめる（中略）。病後にはじめて、私は自分の運命を肯定することがいかに大切かわかった。このようにして私は、どんなに不可解なことが起こっても、それを拒むことのない自我を鍛えた。つまりそれは真実に耐える自我であって、それは世界や運命と比べても遜色がない。かくして敗北も勝利と体験する。」[5)]

これらのビジョンについてユングは以下のように述べている。

「この夢や、幻像の中で私の経験した客観性は、完成していく個性化の一部をなしている。この個性化は価値判断とか、感情的結合と呼ばれているものからの離脱を意味している。感情的結合は人間にとって、一般的にはきわめて重要なのだが、しかし投射を含んでいて、自分自身や客観性に到達するためには、この投射を捨て去ることが必要である。（中略）客観的認識によってはじめて現実的な合一が可能である。」

個性化（individuation）とは分析心理学の用語であり、一般的な集合的存在から分化して自分自身となる過程のことをいう。ただし個人と集合的な存在との関係は続き、敵対するのではない[6)]。この個性化は超越機能（transcendent function）と密接な関係があるとされる。これは対立するもの同士が、夢やイメージなど、無意識からもたらされる象徴（symbol）を通して結合するはたらきを指す。この象徴（symbol）が意識に適切に理解されると、深い感動がもたらされ、新しい適応や態度が得られるとされる[7)]。事実、この体験はユングにとって大きな転機となる。彼の主要な著作のほとんどが、これ以後1961年に亡くなるまでに書かれていることがそれを裏付けている。

4-1．臨死体験の内容　二重身との関連

IANDSによる臨死体験の主な内容は以下のとおりである。これらはいわゆる「コア体験」と呼ばれ、報告された臨死体験のほぼすべてに共通するとされる[1)]。

1）深い感動（たいていは平和、幸福、愛について感じる）

2）自分の体を見下ろしているという知覚（いわゆる体外離脱）。しばしば（自身が）蘇生

されているのを見たり、瞬時に他の場所に移動できたりする。

3）暗闇をすばやく通り抜けて、言葉に表しがたい光へと向かう。

4）スピリチュアルな世界のような景色の中で、どこか他のところにいるという感覚

5）信じられないほど素早い、シャープな思考や観察

6）亡くなった愛する人たち、聖なる存在（神、キリスト、聖人）、よく分からない存在と出会い、心の中で会話ができる。

7）人生回顧、行動の追体験とそれが他者の気持ちに与えた影響を感じる。

8）いくつかのケースにおいて、人生や宇宙のありのままに関するあふれるほどの知識

9）しばしば自身の体に戻る決断

2）の体外離脱はもう一人の自分を見るという意味において、自己像幻視（Doppelgänger）と類似の体験であるといえる。自己像幻視は二重身とも呼ばれ、もう片方の自分には意識がないもの、双方に意識があるもの、姿は見えないがその存在を感じる（実体的意識性）ものまでその範囲は幅広い。これはてんかんをはじめとする器質的疾患、種々の精神疾患、そして正常人にもおこることが知られている。石福はこれについて、因果論的に説明づけられるものではなく、二重身の起こる状況がただその人に布置されているのだということを指摘している[8)]。

二重身は世界中の民間伝承、小説などに認められ、その体験者は近いうちに死ぬという考えは、日本でもヨーロッパでも共通している。河合は一般に稀とされる二重身の夢が、日本人に比較的多く見られることを述べた上で、二重身の夢が自我像の急激な改変の予想に関係していること、死が急激な変化の象徴的表現であることを指摘している[9)]。臨死体験は文字通り死にかける体験であり、その人の身体的、あるいは精神的クライシスにおいて起こる現象である。従ってこの際に、二重身類似の体験を伴うことは河合の考えと矛盾しない。

4-2．臨死体験の内容　日本人と欧米諸国との違い

臨死体験の基本的な内容は同じでも、そこに何を、どのように見るかには、それぞれの民族の文化や宗教観が色濃く反映される。例えば3）の体験は欧米においてもっとも重要と見なされる体験である。この光は聖なる光であり、しばしば神、キリスト教、愛などと同一視される[10)]。これについて立花は、聖書の「神は光である」という表現に代表される、キリスト教文化の影響を指摘している[10)]。日本人も超自然的な光の体験はするが、頻度は欧米ほど高くなく、また、光はあくまでも光であって、その光が神や愛などと同一視されることは少ない[10)]。

6）についても、欧米では高率に神やキリストと出会い、それらとテレパシーのように会話するという報告が多いのに対して、日本人は亡くなった人には会うが、神や仏に会うこと

は少ない。またそのような存在と出会ったとしても、会話をすることはあまりない[10]。立花は中世の日本の臨死体験において頻回に登場する閻魔さまが、現代の日本人の臨死体験においてはほとんど体験されなくなっていることを指摘し、その内容が当時の仏教説話や地獄絵巻などの内容と合致していることから、臨死体験がその時代の社会に共有されている死後の世界のイメージに大きく影響されるのではないかと推察している。

しかし、時代が変わってもさほど変わらない内容もある。例えば4）において、欧米と比較して、日本人は高率に三途の川とお花畑を体験するという[10]。日本人の体験者の3割近い人が三途の川に出会い、それは大抵、あの世とこの世との境界を示す。そして何らかの理由でこの川を渡らずに生還する。しかし欧米の場合、この境界は門、柵、壁などによって示されるという[10]。立花は現在の日本人のほとんどは、閻魔さまも三途の川ももはや信じていないにも関わらず、前者のイメージが消えたのに対して後者は今も残っていることについて「社会に共有されている死後のイメージが反映されているというだけでは説明できない」としている[10]。

分析心理学を用いて、この理由について説明できるかもしれない。その前にユングによる無意識の概念について知る必要がある。ユングは無意識を、個人的な体験の中で抑圧されたり忘れ去られたりしたものからなる個人的無意識と、個人的体験とは別に人類に元来備わった普遍的、神話的な集合的無意識からなるとした[11]。さらにこれは多層的な構造をなしており、個人的内容から遠ざかるほど、普遍的な内容に近づいていく。そのなかにはもちろん、日本人に共通する無意識の層も存在する。

また心は球と対照することができる。それは意識と無意識からなり、意識の中心は自我と呼ばれる。球全体の中心に当たる部分は自己（Self）と呼ばれ、それは中心であり、かつ全体であると考えられている[12]。自己は人の最も充実した潜在力と統一された人格の元型的イメージ（人類に共通の普遍的なイメージ）であり、夢、神話、おとぎ話などにおいては通常、王、英雄、予言者、聖人などの姿で、もしくは円、正方形、十字架などの形で表される[12] [13]。

自己の象徴は、常に神秘的で謎めいており、深い感動をもたらす（ヌミノース numinosum）[14]。そして自我と自己との関係は動くものと動かすものとの関係に例えられる。自我の態度が一面的になっているとき、自己は夢やファンタジーなどを通して、自我にそれを伝える。それらは自我によって読み解かれて適切に理解され、一面的な態度に均衡がもたらされる必要があり（補償 compensation）、従って自我と自己は協力し合う関係にある。これは前述の超越機能に相当する[15]。

これらを元に、日本人の臨死体験の内容について考えてみたい。光、お花畑、三途の川とはすべて自然の風景のイメージである。閻魔さまが忘れられてこれらが残っているということは、これら自然のイメージが日本人が共有する無意識の層に属するものであるからに他な

らない。西洋において神やキリストが自己＝全体性の象徴であるとするなら、日本においてそれに対応するものは自然の風景だと言える。

これを裏付けるものとして昔話を例にあげたい。昔話は全人類にとって共通と言ってよいほどの普遍性と、その属する文化に特徴的と思われる側面をあわせ持っている[16)]。例えば「うぐいすの里」に代表される「見るなの座敷」のモチーフは、全世界の昔話において認められるが、そのなかに何があるかは文化差が顕著に表れる。西洋の類話においては女の死体（青ひげ）や、三位一体の像（マリアの子ども）のように、人間の形をとるものが圧倒的に多い。これに対して、日本の昔話では「梅にうぐいす」や「稲の成長段階」など、自然の美をあらわすものがほとんである[16)]。

著者は現在ヨーロッパ在住だが、どの都市においても教会を始めとする伝統的な建造物には、人をかたどった彫像が所狭しと配置されていることに驚かされ、しばしば違和感すら感じる。これは全体性のシンボルが人の形で表現されやすいという西洋の特徴を示している。立花は現在のインド人の臨死体験のほとんどに閻魔の起源である、ヤムラージという神が現れることを指摘している[17)]。閻魔は仏教的世界観とともに日本人に一時受け入れられたが、その後数百年の間に忘れられたのである。従って、自然の美を持って全体性の象徴とするのは、仏教が伝来する以前の神道的世界観に基づくものであり、日本人に固有の特徴ではないかと考えられる。

4－3．未開部族の臨死体験

立花はさらに、未開部族の臨死体験が先進国のものとの共通性に乏しく、いわゆるコア体験もほとんど認められないことから、死の概念の違いによって臨死体験の内容も変化することを指摘し、願望充足的な内容も認められることなどから夢の一種ではないかとする説などを紹介している[17)]。

中沢は未開人の住む世界を、人間と動物、個人と全体、支配と被支配、死と生の間に差異のない対称性の思考に彩られた世界として、現在の国家や一神教に象徴される非対称的な世界と区別した[18)]。恐らくいわゆる臨死体験とは非対称性の社会に共通して観察される現象、すなわち国家が成立し、死が生と峻別されるようになって以後に、普遍的な体験としてまとまりをもちはじめるものではないか。

夢の機能を願望充足とするのはフロイトによって提唱された理論であるが、ユングの夢に対する考えはこれと異なっている。ユングは夢の主な機能を補償（compensation）と目的追求性（finality）とし、「自発的でない表現であり、無意識の心のプロセスである」と考えた[19)]。夢と臨死体験は同一のものとは言い難いが、無意識のマテリアルという意味においてはその源泉は同じであり、補償や目的追求性という観点から論じることが可能であるし、そうすることでよりその意味がはっきりするのではないかと思われる。

補償という観点から臨死体験を考えた場合、なぜほぼすべての人たちが表現はことなるにせよ、神や美しい自然の風景といった、いわゆる全体性＝自己の象徴というものと遭遇するのかという疑問に対する答えが得られる。フォン・フランツは「実際の個性化の過程、自分の内的な中心（心の核）すなわち自己との意識による対話は、一般に人格が傷つけられ、それに伴う苦悩によってはじまる」としている[20]。つまり、自己が超越機能に向けて働きはじめるのは、まさにその人にとっての危機的状況においてなのである。死はすべての生物にとって危機の最たるものといえるだろう。

5．臨死体験と児童虐待

従って分析心理学的に考えると、臨死体験とはその人の最大の危機において全体性＝自己の働きが活性化され、自我がそれと接触し、その結果、ドラスティックな価値観の変化と強い感動体験がもたらされるものだと考えることができる。そうすると、臨死体験の有無と児童虐待を受けた体験に相関が認められるという説にも、ある程度の説明が可能となる[21]。

臨死体験の有無と児童虐待との相関は主に、解離症状との関連で説明が試みられることが多い。すなわち臨死体験は一種の解離症状であり、児童虐待の被害者は解離症状またはその傾向を有することが多い。そのためにこの人たちが臨死体験をしやすい傾向にあるのではないかという仮説である。しかし、解離症状とはその人にとって受け入れがたい現実を、いわば人格の発達を犠牲にして断片化し、追い払ってしまうことで、こころを守ろうとする絶望的な努力であり、全体性との接触による均衡の回復とは正反対のはたらきである。従ってこれらを同じものとして論ずるには無理がある。

分析心理学において自我と自己とをつなぐものは自我ー自己軸（ego - self axis）と呼ばれる。このつながりがあるからこそ、人は無意識とコンタクトすることができる。そしてしっかりした自我ー自己軸ができるには、質のよい母子関係が不可欠とされる[22]。すなわち、幼少期に適切に養育されなかった場合、自我ー自己軸はいびつな形にとどまる。具体的には自分の感情とうまくつながることが出来ず、象徴的な理解が困難であり、内省が出来ず、自分とも周囲ともうまくやっていけないなどの問題を抱えることになる[23]。

このような困難を抱えて生きてきた人たちにとって、臨死体験、すなわち自己＝全体性とのつながりを回復させるという体験が、如何に唯一無二の治癒効果を持つものか、容易に想像が付く。もちろん臨死体験はほとんどすべての人々にとって、人生の転換点となりうる体験であるが、なかでもそれまで無意識とのコンタクトが極めて困難だった人々にとっては、よりドラスティックな体験であろう。これは仮説であるが、虐待の被害者が臨死体験をしやすいというよりは、彼らの中に臨死体験によって生き方が180度変わり、それについて積極的に情報を発信し、発言するようになる人が多いのではないか。

6．臨死体験後の変化

立花は臨死体験後の宗教意識の変化についての調査結果を紹介している。それによると

1．自分は宗教的というよりはスピリチュアル（霊的、精神的）だとみなす。
2．内的に神を身近な存在として感じる。
3．礼拝などといった既成の宗教の形式的側面に重きをおかなくなる。
4．宗教的信仰などとは無関係に死後の生があることを確信するようになる。
5．輪廻転生という考えにも偏見をもたないようになる。また、東洋の宗教に対して全般的にシンパシーを感じるようになる。
6．全ての宗教がその基盤をなす本質部分では一致していると考えるようになる。
7．全人類を包むような普遍的宗教の確立を願うようになる。

などが主な特徴としてあげられるという[24]。

臨死体験の後、死ぬことが怖くなくなった、というのも体験者にほぼ共通した感想である[25]。しかし、だから早い死を願うということではなく、与えられた残りの生を精一杯生きようという気持ちになるのだという。ユングは「宗教は疑いの余地なく、最も早期で最も普遍的な人間の心の表現のひとつである」と述べている[25]。すべての信条は本来、一方ではヌミノース体験に基づくものであり、他方ではヌミノース性の体験とそれに続いて起こる意識の変化における信頼、忠誠などに基づくものであるとも述べている[26]。従って上記の態度とは、宗教が長い年月を経て現在のように複雑多岐に分化する以前に、すべての人間が本来持っていた、根源的で素朴な宗教心に他ならない。

さらに立花は臨死体験後に超能力を有するようになった、UFO（未確認飛行物体）とコンタクトできるようになったという意見も紹介している[24]。これは、臨死体験が現実の体験であると主張する人々にとっても、その真偽について意見がわかれるところのようである。その真偽はともかく、臨死体験後、主観的にUFO体験をするようになったことについては、分析心理学的に説明が可能であると思われる。

「空飛ぶ円盤」はユング最後の著作であるが、その中で彼は、その形状が円形であることが多く、しばしば光輝につつまれていることなどと神、マンダラとの関連を指摘している[27]。さらにそれが対立するものを結合し、全体性を回復するいわゆる自己のシンボルであることと、第二次世界大戦後の東西冷戦を背景に、UFOに関する報告が増加していることを関連付けて、UFOが現代の神話における神であり自己＝全体性のシンボルであると結論づけている[27]。そのように考えると、UFO体験というのは、実世界における自己＝全体性との邂逅とも考えられ、臨死体験後、そういった体験を抵抗なく受け入れるようになったということなのかもしれない。

ユングはその著書「タイプ論」において、人の性格において外向、内向という二つの心理的態度が認められることを指摘した。こころのエネルギーが外界の事象に向かう傾向を外向

的と言い、内界に向かう傾向を内向的という[28]。UFOの体験というのは自己＝全体性の象徴を外界に見ることであり、外向的な態度に属する。UFO体験が外向的な傾向をもつものが多いと言われるアメリカにおいて多く報告され、内向的なものが多いとされる本邦において少ないのは、このことを反映しているのかも知れない。

しかし、このような超自然的な体験は、自我のあり方如何によっては、自我肥大に至る危険性をはらんでいる。すでに述べたように、自我はあくまでも意識の中心であり、自己は無意識も含んだすべての中心であり、従って両者はまったく別のものである。しかし、自我肥大した状態においては両者がしばしば混同される。例えば、誇大妄想は自我と自己とが同一視されたもっとも顕著な状態である。立花は臨死体験者の中に、体験後、すべての超自然的な体験を現実のものとして受け入れるようになる人がいることを指摘している[29]。これらをすべて現実のものとして受け入れてしまう態度も、科学的に説明が出来ないという理由から一蹴してしまう態度も、どちらも適切ではない。大切なのはそれを相対化し、その存在の意味について考えることである。

7．症　例

次に坂田の症例と、著者の経験した症例について呈示する[30]。後者はコア体験に乏しく、いわゆる典型的な臨死体験ではないが、その意味について考える上で有用であると考えられる。なお、症例の詳細については考察に差し障りのない範囲で変更している。

症例（1）　50歳代　女性

既往歴、家族歴に特記すべきことなし。他院外来でチアノーゼが出現し、心停止、呼吸停止の状態となったため、近畿大学医学部附属病院救命救急センター（以下センター）に搬送された。救急蘇生により心拍が再開し、入室約1ヶ月目に意識状態が回復し、以下の内容を述べた。

「頭が痛いと思った瞬間、何もわからなくなった。どこかに来ているようだった。前のほうに薄明かりがあって花畑が見えた。なんともいえない、いい心地のする色だった。音が聞こえて幸せ気分だった。何かで気がつくと病院だった。みんな私を引っ張ってくれていた。」

本人はこの経験を振り返って、「これから先も頑張って、自分を見つめながらみんなと幸せに生きていく」と述べた。約2ヶ月後に自宅退院となった。

症例（2）　60歳代　女性

既往歴、家族歴に特記すべきことなし。夫と二人暮らしであるが、長年の間、諍いが絶えなかった。夫と口論後、農薬を服毒して自殺企図。その後帰宅した夫に発見され、センターに搬送された。来院時意識レベルはJCSⅢ-300、心停止、呼吸停止はなし。ICU入室後、

約１週間を経て意識が回復し、ベッドサイドで次のように語った。

「先生はきっと信じないと思うけれど、わたし飛んで家に帰っていました。自由に空が飛べたんです。そしたら家に新しい部屋が１つ増えてて、わたし今までそんな部屋があるって知りませんでした。新しくできたのかもしれません。（中略）もう大丈夫です。主人とは今までいろいろありましたけど、このことでもう大丈夫な気がするんです。頭がおかしくなったとかそういうのではないんです。何かうまく言えませんけど、もう大丈夫です。」

ICU 退室後、精神科病棟にしばらく入院して様子を見たが、この体験についてははっきりと覚えており、内容についても変化はなかった。増えたという部屋について家族にしばしば確認して、そのような事実はないと何度も説明され、納得したが「それでも見たのだ」という主張は変わらなかった。顕著な精神症状はなく、本人の強い希望もあって、数週間後に自宅退院となった。

8．考　察

症例１にはコア体験が多く認められる。美しいお花畑も現れ、いわゆる日本人の典型的な臨死体験に近い。体験を振り返って、残された生を精一杯頑張って生きていこうとする姿勢も同様である。

症例（２）においては、体外離脱や瞬間移動と考えられる体験が認められる。注目すべきは「自宅の部屋が増えている」という内容であろう。象徴としての家は、世界の中心であり、人体であり、こころのさまざまな状態、保護するもの、女性性などのシンボルとされる。そして部屋から部屋へ、あるいは階上、階下への移動はこころの成長の停滞あるいは発展、退行あるいは進歩、精神性或いは物質性といった状態を表す[31]。家をこころのシンボルだと考えた場合、部屋が増えたということは恐らく、新しい適応、新しい態度、守られる場所などを象徴するのではないだろうか。

人間はその人生の転換期において象徴的な死を体験しなければならない。それが実際の死と混同されるほどに追い詰められた場合、自ら命を絶つ行為に至る。従って心理療法においては、如何に患者を企図に至らせずに、象徴的な死を体験させるかということが重要事項になる[31]。しかし症例２のように、自殺企図から生還することによってカタルシスを得て、残りの生を生きていく決意をする者もある。自殺は予防できることがもっとも望ましいのはもちろんだが、企図によってそれまでの膠着状態が打開され、事態が進展するケースも数多くある。「部屋数の増えた家」はまさしく、患者にとっての自己＝全体性の象徴であり、それによってカタルシスを得たことは間違いない。

9．まとめ

これらのことから分析心理学的観点から臨死体験について以下のような結論が導き出され

る。

1．臨死体験とは人間が最もドラマティックな形で無意識、とくに自己＝全体性と遭遇する体験であるといえる。それは死という生物にとって最も危機的な状況下で、超越機能が作動することによって起こる。

2．臨死体験にはさまざまな内容が含まれるが、核をなす部分には普遍的な同一性が認められる。典型的な日本人の臨死体験に美しい自然の風景が多く見られるのは、それが我々の共有する無意識にある自己＝全体性の象徴だからである。

3．未開部族と現代人との臨死体験に差が見られるのは、恐らく死の概念の違いによる。現代人の臨死体験はおそらく、死が生と峻別されるようになって以後に、普遍的な体験としてまとまりをもち始めたものと考えられる。

4．臨死体験後に一般に起こる内的な変化は、ヌミノースな体験をつうじて、人間本来の根源的で素朴な宗教心に立ち戻ったと理解することが出来る。一方、臨死体験後の超能力の獲得やUFOとの接触などは、神なる者を外部に見ているという意味において、その人の外向的な心理的態度と関連がある。

10. おわりに

臨死体験について分析心理学的な見地から考察した。夢もさまざまなイメージも、すべて無意識から送られてくるものであり、臨死体験も例外ではない。従って臨死体験はすぐれて心理学的な事象であり、事実か事実でないかということだけでなく、その心理学的な意味について考察することが大切ではないかと考えられる。

参考文献

1）http://iands.org/what-is-an-nde.html

2）Zalika Klemen-Ketis, Janko Kersnik and Stefek Grmec: The effect of carbon dioxide on near-death experiences in out-of- hospital cardiac arrest survivors: a prospective observational study. Critical Care. 2010. 14:R56

3）Susan J Blackmore: Near death experience. J R Soc Med 1996 (89) 73-76

4）立花隆　臨死体験（上）　文藝春秋　東京　1994　pp.363

5）ユング自伝２　－思い出・夢・思想－　ヤッフェ編　河合隼雄　藤縄昭　出井淑子訳　みすず書房　東京　1973　PP.125-136

6）C.G.Jung.（translated by H.G.Baynes）Psychological Types. Princeton University Press. 1974. Princeton. pp.448-450

7）ibid (6)　pp.473-481

8）石福恒雄　二重身の臨床精神病理学的研究　精神神経学雑誌 81 (1)　1979　pp.33～61

9）河合隼雄　影の現象学　講談社学術文庫　東京　1987　pp.121
10）立花隆　臨死体験（下）　文藝春秋　東京　1994　pp.69-99
11）ibid（6）　pp.483-486
12）A. Samuels, B. Shorter and F. Plaut, A critical dictionary of Jungian analysis Routledge. Kondon London. 1986. pp.135
13）Ibid（6）　pp.460-461
14）Ibid（12）　pp.100
15）Ibid（12）　pp.52
16）河合隼雄　昔話と日本人の心　岩波学術文　東京　2002 pp.1-44
17）ibid（10）　pp.101-131
18）中沢新一　対称性人類学　講談社選書メティエ　東京　2004. pp.35-63
19）L.Frey-Rohn. From Freud to Jung, Comparative study of the psychology of the unconscious. Shamabhala. Boston. 1974. pp.205-253.
20）C.G.ユング、M.L.フォン・フランツ、J.L.ヘンダーソンら　河合隼雄監訳　人間と象徴（下）　河出書房新社　東京　1975　pp.19
21）Ibid（4）　pp.273-299
22）Ibid（12）　pp.52
23）カトリン・アスパー　老松克博訳　自己愛障害の臨床　見捨てられと自己疎外　創元社　東京　2001 pp.49-80
24）Ibid（4）　pp.213-244
25）Ibid（4）　pp.9-54
26）C.G.Jung（Translated by R.F.C.Hull）Psychology and Religion: West and East. Princeton University Press. New Jersey. 1969. pp.5-63
27）C.G.Jung（Translated by R.F.C.Hull）Flying Saucers: A Modern Myth of Seein in the Skies. Civilization in Transition. Routledge. London. 1970. pp.309-433.
28）Ibid（6）　pp.333-404
29）Ibid（10）　pp.39-68
30）Ikuhiro Sakata: Near death experience: a case report. Acta Med Kinki Univ. 2004. 29（1）23-25
31）Jean Chevalier, Alain Gheerbrant（translated by John Buchanan-Brown）Dictionary of Symbols. London. 1969. Penguin Reference. pp.529-530
32）J. Hillman. Suicide and the Soul. Spring publication. New York. 1973. pp.56-76